

皮膚科のトリビア

222

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

本欄は、小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●某製薬会社主催Web講演会から

令和4年9月7日

SCRUM-Japanとは

SCRUM-Japanは国立がんセンター東病院が主導する産学連携癌ゲノムスクリーニングプロジェクト。組織だけでなく、血液を用いた遺伝子解析(リキッドバイオプシー)、糞便を用いた腸内細菌叢(マイクロバイーム)の検査・解析などを行い、個々の患者ごとに最適な治療法の選択および新たな治療法の確立を目指している。特定の遺伝子変異があれば、新薬の臨床試験に参加することも可能。現在、肺癌を対象とするLC-SCRUM-Asiaと、消化器癌などの固形癌を対象としたMONSTAR-SCREENの2つのプロジェクトが進行中。2017年に設立され、これまで6つの保険適用の新薬と5つの診断薬を創出している。

一言コメント

「こういった取り組みがあることは知らなかった。患者にとっては無料で高精度の遺伝子パネル検査を受けたり、新薬の治験にも参加できるメリットがある。」

●第11回横浜中部腎疾患ネットワークから

令和4年9月9日

細胞外抗酸化物質のまとめ

ヒトの進化の過程で必要とされた細胞外抗酸化物質としては、ビタミンC(アスコルビン酸)と尿酸が有

名。ビタミンCの不足は壊血病をひきおこし、過剰だと腎不全下でシュウ酸蓄積症をひきおこす。尿酸の不足はキサンチン尿症でみられ、腎性低尿酸血症では、運動後に腰背部痛と嘔気を伴う急性腎不全(acute renal failure with severe loin pain and patchy renal ischemia after anaerobic exercise: ALPE)をおこしやすいことが知られている。高尿酸血症では痛風、尿路結石が生じ、最近では心血管疾患や慢性腎臓病との関連も指摘されている。

一言コメント

「尿酸は3分の2が腎から、3分の1が腸管から排泄されるが、腎では90%が再吸収されていて、なんらかの有益な生理学的作用があるのだろうと考えられている。尿酸の生体内での役割は、まだ不明な点が多いらしい。」

●第11回糖尿病ラウンドセッションから

令和4年9月13日

異常ヘモグロビン症とHbA1c

50歳代白人男性。インスリン非依存性の2型糖尿病。随時血糖228 mg/dL, HbA1c(HPLC法)5.8%, グリコアルブミン(GA)32.9%, 食前血糖202 mg/dL, 食後血糖330 mg/dL, 食前Cペプチド0.61 ng/mL, 食後Cペプチド1.31 ng/dL。血糖値とHbA1cに乖離がみられた。GAも高かったため(正常:11~16%), HbA1cを酵素法で測定したところ11.4%であった。基盤に異常ヘモグロビン症があることが判明した。測定法の変更でHbA1cを正しく評価できた。

一言コメント

「GAはHbA1cと同様の血糖管理のマーカーだが、半減期が17日で、2週間前から現在までの比較的短期間の平均的な血糖値を反映している。血糖値の変動幅が大きい糖尿病患者やアルブミン濃度の変動が顕著な妊婦の糖尿病コントロール、薬物療法やインスリン投与を行っている患者の治療経過を追ううえで有用。」

●第71回日本アレルギー学会学術大会から
令和4年10月7日

ナッツアレルギーの交差反応

ナッツ類はIgE依存性食物アレルギーの原因として近年増加傾向で、とくにクルミ、カシューナッツではアナフィラキシーなどの重症型も多く、慎重な管理が必要な食物である。ナッツにはさまざまな種類があるが、一般的には一括りにされることが多い。アレルゲンとしては2Sアルブミン、7Sグロブリン、11Sグロブリン、PR-10、LTP、プロフィリンが知られているが、ナッツ類間の交差反応性はそれぞれの種類によって異なっている。2Sアルブミンではクルミとピーカンナッツ、カシューナッツとピスタチオの間の配列が類似しているが、ピーナッツや大豆との同一性はない。11Sグロブリンではナッツ類、ピーナッツ、大豆で2Sアルブミンより同一性が高い。クルミのJug r 1、カシューナッツのAna o 3はコンポーネント検査が可能である。

一言コメント

「クルミがだめでもピーカンナッツ以外は大丈夫、カシューナッツがだめでもピスタチオ以外は大丈夫、という指導をしてよいということのようだ。」

●第71回日本アレルギー学会学術大会から
令和4年10月7日

上皮バリア仮説からみる環境とアレルギーの関連

環境省主導で進められている大規模出生コホート調査(エコチル調査)では、参加者から集めた検体の環境化学物質の測定を開始した。洗濯洗剤や

ディッシュウォッシャー用の洗剤などはベッド、ソファ、バスルームなどのホコリから多く検出されている。それらが皮膚、気道、腸管などの上皮のバリアを低下させ、炎症が生じ、病原体が生着し、上皮下に侵入し、共生する微生物とのバランス失調を誘導することで免疫反応がおこり、上皮修復機能が低下し、さらにバリア障害が進行する。上皮バリア仮説は環境の変化がアレルギー、免疫疾患の発症をひき起こすという説を裏づけるものである。

一言コメント

「洗剤がホコリにくっついているという話は聞いたことがなかった。生活様式の近代化がアレルギー疾患増加の誘因になっていることは間違いなさそうだ。」

●第71回日本アレルギー学会学術大会から
令和4年10月8日

多形妊娠疹(polymorphic eruption of pregnancy)

20歳代後半の初産妊婦。妊娠4カ月ごろから下肢から紅斑が出現し、全身に拡大、多形妊娠疹と診断。9カ月からはプレドニゾロン(PSL)20 mg/日の投与が必要となった。出産までに5 mg/日に減量し、出産後には中止した。寛解を維持していたが、出産1カ月で同様の発疹が再燃。再びPSLの投与が必要となった。出産後に再燃する例はまれである。頻度は200人に1人。一般的には妊娠後期、腹部とくに妊娠線上から始まることが多く、四肢に及ぶ。掌蹠には水疱をきたすこともある。

一言コメント

「pruritic urticarial papules and plaques of pregnancy(PUPPP)と同義だが、こちらのほうが日本語としてわかりやすい。それにしても原因は相変わらず不明で、進歩はないようだ。」